



こんぴらさん障壁画の謎

—若冲・岸岱をめぐって—

おわりに

以上、多くの既往の諸研究に拠りながら、奥書院障壁画の沿革について概略および不明事項の紹介を試みた。

若冲の障壁画が失われたことは惜まれるが、《垂柳図》のごとく懇意の寺などに下賜された可能性はあり、屏風絵や衝立絵として仕立て直されているかもしれない。

岸岱は、現代においては若冲、応挙に知名度も人気の面でも劣っているが、岸派二代目として京都画壇のトップで活躍した画家であり、今後のさらなる評価を期待したい。

書院においては過去幾度の修繕を重ねてきた。金刀比羅宮では宝物の汚損や散逸にそなえて、調査を行い、画家による模写や図録の編纂発行など文化財の記録に努めてきた。

どのような調査や記録がされてきたかみていくと

寛政6年(1794)『象頭山霊宝録』刊行

弘化4年(1847)3月8日から合葉文山に寺内の絵図残らず書き写させる。

4月2日、合葉文山、絵図を写し終る。

嘉永2年(1849)七賢の間破損したため合葉文山が表書院一体を模写¹

文久2年(1862)8月19日、高松絵師安原枝澄登山、宝物描き写させる。

9月24日、梶原藍水『讃岐国名勝図会 金毘羅之部』のことに付き、登山

9月28日、梶原藍水、宝物取調終わり、酒料理下さる。

11月9日、宝物縮図骨折りに付き、松岡調に挨拶として二両遣わす。

文久年間(1861~1864)《扁額縮図》紙本着色、各29.0×42.0、全8帖成る。これは、金毘羅大権現に奉納された

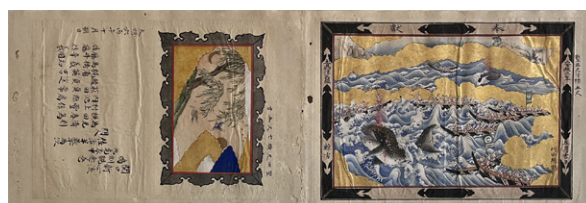
絵馬・扁額などを縮写したもので、それぞれ「石」、「糸」、「竹」、「匏」、「革」、「木」、「土」、「金(題箋欠落)」の題箋が付されている。



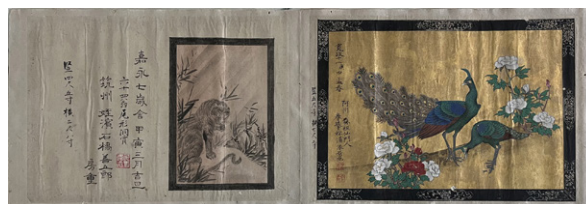
表紙



「石」



「竹」



「金」



「糸」より

岸岱が描いた馬の額が当時あったことがわかり、『金刀比羅宮史料』7巻に次のように記される。
「馬之図扁額 板地墨画壁二尺三寸、横三尺五寸
款云 筑前介岸岱
緑書云奉納丹州亀山桑田郡穴川邑願主爲脩」

《扁額縮図》に描かれた絵馬・扁額は現存しているものもあり、一例を示すと次のようなものが伝わっている。



「糸」より



森一鳳(鷲図)



「糸」より



錦木梅溪(牡丹孔雀図)



「絲」より



冷泉為恭《駒迎図》



「金」より



森祖仙《猿図》



「金」より



山口重春《素尊斬蟒図》



「竹」より



谷文晁《羅陵王図》

慶応2年(1866)4月、松岡調『象頭山神宝録』三巻編し終わる。

明治35年(1902)、邨田丹陵が応挙の襖を模写し木版にする²。

明治37年(1904)7月16日、宝物館開館³。

明治40年(1907)『金刀比羅宮記』刊

明治41年(1908)『貴重品台帳』『什物台帳』『宝物台帳』編

明治44年(1911)～昭和19年(1944)にかけて『金刀比羅宮史料』

90巻編集

大正8年(1919)『金刀比羅宮私記』編

大正10年(1921)『金刀比羅宮崇敬史』編

昭和2年(1927)『金刀比羅宮絵馬鑑』刊、『金刀比羅宮神徳史』編

昭和3年(1928)『学芸参考品台帳』編

昭和6年(1931)『金刀比羅宮景勝帖』刊

昭和10年(1935)『金刀比羅宮応挙画集』刊

昭和11年(1936)『金刀比羅宮絵馬鑑第二編』刊

昭和15年(1940)『金刀比羅宮由一画集』刊

昭和57年(1982)～昭和59年(1984)『金毘羅庶民信仰資料集』

全3巻

など、松原秀明「解説I 金刀比羅宮の所蔵資料について」『金毘羅庶民信仰資料集 年表篇』(金刀比羅宮社務所、1988)に詳しい。



金刀比羅宮史料

障壁画は収蔵庫で保管される文化財と違い、木造建築のため虫害や温湿度の変化、紫外線による退色など影響を受けやすく、作品にとって負担は大きい。過去の記録をみても30年に1度は裏打ち等の修理が必要と思われる。

近年、障壁画の劣化を防ぎ保存する目的から収蔵庫等の施設へ移設し、もとの建築物には模写絵や高精細に印刷された複製を制作し公開する事例がみられる。金刀比羅宮の書院障壁画も、この先、劣化が進行し現場での保存が困難になれば、検討される日が来るかもしれない。過去の例として保存目的ではないが、『金刀比羅宮書院の美』展覧会(2007.7.7～9.9東京藝術大学大学美術館、



「土」より



多賀子健《猩猩図》



2008.4.26～6.8三重県立美術館、2008.10.15～12.8フランス国立ギメ東洋美術館)において、書院障壁画の壁貼付絵は持ち出せない

ため複製品が使用された(2007.10.1～12.2、12.29～2008.1.31金刀比羅宮会場では使用せず)。



「金刀比羅宮書院の美」巡回展示の様子(写真は東京藝術大学大学美術館) 壁貼付絵はキヤノン株式会社による高精細複製品を使用した。



一月一日 拝賀式 奥書院「上段の間」に有栖川宮熾仁親王揮毫「賢所」軸を掛け、宮中賢所選擇。建物東側障子を明け、君が代斉唱。「菖蒲の間」「柳の間」にて朗詠「嘉辰令月」を奏す。

障壁画は建築内部の装飾画であり、その空間に身をおいて本当の魅力を味わうことができる。是非、書院の空間と美術を楽しんでいただきたい。

参考文献

- ①『金刀比羅宮応挙画集』金刀比羅宮社務所第一課、1935
- ②『重要文化財金刀比羅宮表書院修理工事報告書』金刀比羅宮表書院修理委員会、1965
- ③朝日新聞社編『高橋由一と金刀比羅宮博物館』朝日新聞社、1983
- ④松原秀明撰『金毘羅庶民信仰資料集 年表篇』金刀比羅宮社務所、1988
- ⑤伊藤大輔「常若の絵画－金刀比羅宮の障壁画」『金刀比羅宮の名宝－絵画』金刀比羅宮、2004
- ⑥西牟田崇生「明治三十三年の金刀比羅宮宝物調査－『国宝さぬき日記』より－」『こと比ら』62号、pp.316-341、2007

- ¹ ①『金刀比羅宮応挙画集』pp.8-9
- ² ②『表書院修理工事報告書』p.7、③『高橋由一と金刀比羅宮博物館』p.79
- ³ ⑥西牟田崇生「明治三十三年の金刀比羅宮宝物調査－『国宝さぬき日記』より－」p.324
宝物館は、明治34年(1901)の国宝指定・明治35年(1902)の七賢人汚損事件を契機とし、宝物類を文化財として保存し展示公開するため設けられた。
昭和27年(1952)、宝物館と学芸参考館を合わせて博物館として指定され、日本の登録博物館第一号となる。